

文明学について

はじめに

文明学の成立と文明事象の存在とは別のことである。文明事象、あるいは文化現象といつてもよいであろうが、そのような人間の原事象ないし歴史事象は、それを対象としてそれに学問的な網かけをした文明論あるいは文明学とは区別されて考えられなければならない。その間に一線が画されるのは、次のような根拠からであろう。すなわち、文明事象は人間が己の営為に対して、歴史的な、言い換えれば共時的・通時的な自覚の網をかけたときからすでにその存在が確認されているものである。それは、一般に文明の表象の起源ということになるであろう。その表象は文明事象ないし文化現象の意識を産む。

それに対して文明学ないし文明論は一九世紀後半から今世紀の初めの頃に、もっぱら西欧の世界で、すなわち一定の歴史的状况のもとで成立した知的な動向ないし運動であると考えられる。他のさまざまな学問動向と同じようにその後、いわば学界に、一つの学問領域として、市民権を要求することになる。そこで改めて文明とはどのようなものとして捉えられるべきかが問題となるで

あろう。

文明学の成立の背後には、言葉にならない、形をなさない訴えが隠されている。どのような状況のもとで文明への問いが提起されているのか。どのような訴えが、またそれは何に対して為されているのか。

そこで提題者はまず、文明学（論）的な訴えについて、次に、学の対象としての文明、その階層構造について、そして第三に、文明学科のカリキュラムについて言及することにする。

文明学的訴え

提題者が文明学的訴えというのは、文明学の形成過程の背後にあって文明学の成立を促す諸要因のことである。そこにはしたがって、文明学の発生過程が隠されている。一般的にいって、新たな知的営為が学的（方法的・認識論的）凝縮をみるのは、そのような訴えを予想しているといえる。文明学の現状を定位するためには、そのような文明の学の成立を促したいわば前学的諸要因に注意を向けておくことが必要であらう。

ここでは文明学の形成を促す要因を以下の三点に絞って考える。

齋藤 博

(a) 己の文化に対する危機意識

いうまでもなく文明ないし文化現象の存在と、文明学の成立とは切り離して理解すべきものである。文明学の自覚的な成立をその発生過程において分析しようとするならば、一九世紀の末から今世紀の二〇年代にかけて、西欧世界において、鮮明になってきた彼らの危機意識を無視することはできない。

ここで危機意識とは、断わるまでもなく個人的な危機意識に還元されるようなものではなく、文化的・社会的に自覚された危機の意識である。重い病を病むものを襲う危機意識はまさに個人的なものである。そのような危機意識は誰でも経験するものであるが、文化的・社会的危機意識はそうではない。文化・社会をあたかも生命をもった有機体としてみる視点が予め求められるであろう。

文明的な訴えはそのような文化・社会の危機意識とともに芽生える。その危機意識は西欧世界を支える文化の未来ないし可能性をめぐって自覚的になっているが(O. Spengler)、そのような意識は文化の比較を促して(A. Toynbee)、やがて西欧世界を超えて普遍的な響きをもって今日に至っている。

(b) 近代の諸学に対する脱構築の訴え

文明学はいまなお播種期であるとしても、一九世紀にはほぼ完成を迎える西欧の実証主義的な諸学に対する基本的な批判ないし訴えに支えられている。批判の対象となっている実証主義的な諸学は、近代の数学的・自然科学の方法すなわち統一的な世界把握の

方法の延長上にあるものである。一九世紀的な西欧の諸学は、文明的な訴えに対して方法的な袋小路に陥っていることを示しているように思う。A・ケストラーの次のような指摘は的確であるう。

愛くるしいコアラグマを例にとろう。この生物はユーカリ樹のうちでもある特定種の葉だけを餌とし、他のものはいっさい食べないように特殊化した。それで五本の指の代わりにかぎ爪があり、これは樹皮をよじ登るのにびったり適しているけれども、他にいっさい使いみちがない。これを人間にたとえれば、愛くるしくない点は別として、考えることも行動もすべてがかたくなに、枠にはまった学者ぶり、習慣の奴隷こそまさにそれだ。(最高学府のある学部などは、ことさらにコアラを養い育てるために設けられたもののようなである。)

『機械の中の幽霊』、p. 219f.

コアラグマという動物が日本の動物園でも子供達の人気を集めている。コアラは、いわば進化の過程で特殊化しすぎたために、動きがとれなくなっている。すなわち近代の西欧的な諸学とそれを支える研究者の学的態度の中に、自分のユーカリ樹にしがみついて離れられないコアラのように、習慣の奴隷になって動きがとれなくなつて、自らの思考も行動も型にはめてしまっている点がないであろうか。

環境が単純であると習慣は機械的になるといえる(ケストラー)。¹⁾しかし機械的になった習慣をもってしては新たな環境の変

化に応えることができないことも明かであろう。近代的な諸学の専門化という特殊化に対する脱構築の訴えが文明学の成立の背景にあると考えるのである。

(c) 人間営為に対する認識論的訴え

近代的な西欧の諸学について、人間の営為を、すなわち人間が生き、働き、話し、考えることから展開する営為を、対象にしたのは人文科学である。自然科学、人文諸科学に対して、文明学はどのような関わりをもつのか、またどのような位置づけが為されるのか、精神分析学、文化人類学といった学問は、人文科学の枠内に納まるものではないであろう。既成の諸学のなかで、文明学は新たな関係構築の訴えをもっているであろう。人間の営為を全体として問題化する学的営為が求められる。ここでは人間の新たな位置づけが問題になるであろう。

文明学の対象としての文明について

提題者は、学の対象としての文明は、人間の営為の総体であると考えられる。ここで強調されるのは対象の全体性である。そこで全体を認識の対象に据えるための認識論的構えが要求されることはいうまでもない。ここではその認識論的構えについての言及は省かざるを得ない。

人間の営為が歴史的・民族的に多様な展開を示すものであることはいうまでもない。通時的・共時的に裁断する限り、人間営為の多様な展開は細分化されることも明かである。そこでそのよう

な部分的把握を避けるために、人間の営為を構造として理解することが要求される。文明という人間の営為の総体は人間の営みの構造態として捉えられる。

人間の営みをいわゆるその実定性において捉えるならば、生きる、労働する、話し、考える営みとして理解することができる。このような営為がすでに階層構造を成すものとして理解される。生きるという営為は、人間が己の生命と種を再生産するという自然的営為である。この営みはたんに人間独自のものではなく、生命体の共有する自然的営みである。このような自然的営為を通して、人間の営為は自然に開かれ、同時に自然の制約を受けるのである。生きるという営みを通して、人間の文明形成の営みは、あたかも大木のように、自然に深くしかも決定的な根を張ることになる。

生きるという人間の自然的営為は自然に対して依存的関係に置かれているが、人間の労働する営みは、自然から人間自らを解放する営みの始まりである。労働によって人間は自然的な必要を満たすだけでなく、欲求それ自体を再生産し、そのためにさらに労働するのである。それが経済的な価値を再生産していくことはいうまでもない。人間は労働によって、何よりも人間独自の社会的な営みを形成する。資本の蓄積、その配分、さらには権力の関係を社会の内に産出していくのである。これは人間の社会的な営為といえる。自然的営為とは異なった動きをする文明形成の営為であるといふべきである。

文明形成の社会的営為は、人間の営為をたんなる自然的な葛藤から解放すべく規則作りをする。すなわち人間の社会的営為は、自然に対して、作意的・人為的な、すなわち文化的な装置を形成するのである。文明が人間・装置系といわれる所以が此処に認められる。

しかし人間の話し・考える営みは、人間の社会的営為の内面に、すなわち人間の文明形成に、もう一つの階層を加えることになる。話し・考える人間の営みは、象徴を巧みに操作するきわめて人間的な営みとすることができる。それは、人間の個的なあらゆる営み、すなわち自然的・社会的営為のあらゆる場面で発せられる、その現われ、ないしシグナルから、意味すなわち内面的なものを形成する営みである。提題者はこれをひとまず文明形成における象徴的営為としておこう。

象徴的営為は、人間の自然的・社会的営為に内的階層を与えるものであるが、それは人間の営為の総体に意味連関を与えるだけでなく、文明の意味を与えることになる。人間の営為は、自然に根をはった自然的営為の上に、社会的営為を展開するが、そこに形成される人間・装置系は、それ自身が営みすなわち動きであって、それ自身の文明的な意味、ないし価値を目指した営みである。すなわちそれなりの、歴史的・民族的な価値再生産の営みであると考えられる。そしてその価値が一般的に、文明形成過程(civilization)における、文明(Barbarity)に対する文明(civility)という意味のないし価値である。

一定の社会ないし文明と考えられる人間の営為がそれ自身の価値ないし善をたえず再生産し、それに導かれて一定の人間・装置系が動いていく過程は、文明形成過程とみることができただけでなく、その動きは自己修復的な営為でもある。さらにいえば、このような自己修復的な営為は、超越的な営為であることも明かである。

ところで、このように理解された文明すなわち文明の形成過程は開かれた階層構造を持ったものといえる。一方において自然に根を張っており、他方において人間の象徴的・超越的な営為が形成する文明という価値に開かれている。文明の動きは単純化すれば、すなわち善いものを選んで、悪いものを避ける営みといえるのである。このようにして人間の営為は次のような階層構造を成すことになる。すなわち自然的営為は、自己の機能原理を社会的営為の内面に、社会的営為はその秩序原理を自己修復の理念の内面に求めるのである。そのような根拠から人間の営みが文明と言われ得るのである。

civility という理念は超越的なものである。したがって人間の営為は、自己を機能させる原理を自己の構造の自然・必然性からあたかも進化の過程であるかのように、引き出すことはできないのである。なぜならば人間の営為は時間を先取りすることができる、言い換えれば自己の構造をどのように機能させるかを構想することができるからである。

文明学の課題は私達の生きている、そして私達がその主体であ

る今日の文明をどう生きるかということにあるが、しかし文明の学という知的な営為をこの今に限定する必要はない。それどころか、人間営為の全体を射程においておくべきで、いわゆる未開社会に、あるいは無意識の世界にも解明の光を当てなければならぬ。

文明学科のカリキュラムについて

文明学科はとにかく、文明研究のためのカリキュラム、すなわち教育計画を具体化したカリキュラムを持たなければならぬ。本学のこの学科はこれまですでに二〇年以上の年月をかけて試行錯誤を繰り返してきた。その意味で文明学科のカリキュラムの変化をみれば、それぞれの時点で、文明学科が文明をどのように捉え、それをどのように研究し、さらにどのような構想をもってカリキュラムに具体化したかという過去の歩みを辿ることができる。文明学の基礎に関わるカリキュラムの作成と卒業研究ないし専門研究に関わるカリキュラムの作成などについて二三の話題を呈示しておきたい。しかしカリキュラムについては、文学部やそれぞれの研究室の取り組みの問題であって、私達はここではそこまですり込むことはできない。

そこで一言でいえば、まだ残念ながら私達のカリキュラムは文明学に集約されて組み立てられているとはいえない状態であろう。文明学の専門研究とは何を研究するのが明確にならないので、その基礎研究への要求が具体化できず、何のための基礎なのかも

不明なままになっているように思う。

カリキュラムについて必要なことは、文明学なるものを具体的に例示することから始め、それに至るためのカリキュラム化を行なうことであると考えられる。いずれにせよ文明学科に在籍する学生諸君は、文明研究によって、四年間の研究の総仕上げとして卒業研究を完成することが求められている。

カリキュラムについては、多くの卒業生を抱えている私達の文明学会の会員の意見を聴することも必要かとおもう。たとえば文明学科のような場合、卒業研究は重要な位置を占めているので、これまで以上に単位数を多くし、共同研究の枠を認めるのも考慮すべき方向ではないかと考える。